

ネロの血のなしとは言はず花柘榴

藤田湘子

歴史に弱い私はネロがどの時代のどのような人物であるのか正直なところ皆目見当がつかない。かろうじて「暴君ネロ」と言う言葉を聞いた記憶がある位である。その暴君ネロの血がないとは言えない、というのであるから、作者は少なからず、自分の中に暴君の気があることを認めているのであろうか。

湘子の中の暴君さを紐解いてみれば、確かに時折見せる厳しさを思い出すことはできるが、それはあくまでも俳句に対しての厳しさであることに思い到る。あの真っ赤な柘榴の花の激しさと、実が裂けた時のインパクトなど、柘榴の花を見たときに「ネロの血」へ想像の翼が飛んでゆくさまは充分に納得できる。

1983年 (558.06.27作) 第六句集『一個』 鑑賞・野本京